

平成30年8月16日

アカツキファイブ女子強化試合観戦記Ⅲ

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

女子日本代表のディフェンスについてです。

主なディフェンスはハーフコートのマンツーマンでした。形態はノーミドルでした。ラインディレクションを基本とし、ヘルプ&ローテも5人の意思統一がなされていました。

フットワーク(キックステップ~リリースステップ)&ハンドワーク(ボールチェックハンズアップ)は基本通りでした。(ミニバスや中学生に見せたいお手本でした。)

ビジョン&ポジションは、オープンスタンスでした。2線も3線も視野を広く取り、相手のカット及びドライブに備えていました。

スクリーンのディフェンスです。ピックに対しては、プレスの時はヘッジ&ショウからトラップかファイトオーバー、ピックに掛かりそうならスイッチするというコンセプトでした。精度も上がっているようで、完全にやられてしまったケースは、2~3回でした。またオフボールマンのスクリーンに対しては、ファイトオーバーかスライドの対応でした。クロススクリーンやフレアスクリーンに対して、やや遅れることがありました。相手の動き出しの時点でのトーキングがさらに必要になります。

ディフェンスのバリエーションとしては、1-2-2と2-1-2の3/4のゾーンプレスを使っていました。ラインでのトラップ及びコフィンコーナーでのトラップはリオ五輪から継承していたものです。ミドルへのフラッシュ阻止のための手段として、2-1-2のゾーンプレスを導入したのではないかと思います。

そしてエントリーされている選手全員が、トラップ&ローテからパスカットまで、意思の疎通ができていたことに、女子日本代表の結束力を感じました。

このマンツーマンやゾーンプレスディフェンスが、アメリカをはじめ、さらにランキングが上のチームにどこまで通じるのか楽しみになりました。

ディフェンスの課題です。

まず、ポストディフェンスです。世界のセンターは女子でも2m級の選手がたくさんいます。そして、センタープレイだけではなく外で3Pを打ってきます。そんなセンターを抑える第1は、絶対ペイントでボールを持たせないことです。これも南の風で何回も取り上げましたが、センターの選手がエントリーする時から、プレッシャーを掛けるようにフェイス気味に付くことが大事です。ボールを放した後も自由にさせてはなりません。3Pの確率が高い選手なら、なおさら外でのプレイにも敏感になり、マークを厳しくすべきです。また、ポストにボールが入った時に、外へのリロケーションパスへの対応を頭に入れておく必要があります。当然逆サイドにパスが振られることも想定しなければなりません。

次に、1対1のディフェンスカアップです。ボールマンディフェンスのレベルアップです。日本人の特性である、緻密に相手の動きを読み、反応力をさらに伸ばしてほしいと思います。サイズのミスマッチが起こっても、集中力を切らさず果敢にボールチェックに行ったり、動きを読んでコースチェックしたりすることの精度をさらに上げていき、その上で5人の連携したディフェンスをつくり上げてほしいと願います。

次号は観戦記のまとめです。